随　筆

論文作成と方法

若杉　明

1　はじめに

問題を処理し解決策としての結論を導き出すに当たっては、方法を選びこれらを駆使することが、結論の信頼性を確保し作業の効率を高める上で不可欠である。論文の作成はまさに問題の選定と方法の選択に始まる。このようなプロセスを踏まない書き物は論文の名に値しないといってよい。私の専門領域である会計学において現在用いられている方法には、伝統的な帰納法、演繹法、仮説演繹法等をはじめ、他の学問領域から導入された情報理論、コミュニケーション理論、意思決定論、システム論、統計学的諸方法等数々のものがある。ここでは私が演習指導において、学生諸君を指導している論文作成法としての起承転結と意思決定の方法について紹介し検討したいと思う。

2　起承転結について

漢詩のもっとも基本的な四連詩、すなわち四句からなる絶句における起承転結のプロセスを論文作成に当てはめた論理的展開は、きわめて有意義であると思う。論文の作成にさいしての起承転結の有効性については、批判的な意見もあるが、その理由については納得のゆくものではない（注記）。批判者の中には、論文は起承転結ではなく、序論、本論、結論から構成するのが妥当であるという向きがあるが、それは平面的で方法を用いることなく、実質的な中身をともなわない、たんなる文章構成についての主張に過ぎない。

問題を提起し（起）、これをさらに敷衍し（承）、これら起、承の要素を素材として何らかの基礎となる概念や考え方などを用い、テーマを別な角度から論じて（転）、結論を導き出す（結）。研究成果をこのような形でまとめ上げたものは、論理一貫性に富み、読む者をして納得させることのできる説得力をもつ。転の段階では、考えられる種々の方法や概念を用い、また種々の角度から検討することが論ずる際の有力な武器となる。特に転の段階でいえることであるが、方法や概念は必要に応じて複数用いるのが効果的である。

起承転結はこれを調理にたとえることができると思う。起はどのような料理を作るかを決めることであり、承はそのために必要な調理器具、燃料、食材、調味料その他を用意することである。転は食材を、レシピー、調理技術、調理人の持っているセンスなどを使って料理することであって、その結果、最初に目ざした料理が完成する（結）と。

3　意思決定の方法

次に種々の場面でよく用いられる意思決定の方法について考えてみたい。意思決定は、ある問題が生じたときに、その解決のために役立つ手段を選び出す過程である。この方法は一般的に、次のプロセスに従って展開される。

（1）　問題が発生し、これを解決すべきかどうかを判断する。

（2）　問題を解決する事が決定されたならば、その認識と明確化を行う。

（3）　問題解決の手段と考えられる行動の複数の代替案を選び出す。

（4）　代替的解決案を選択適用した場合に生ずると思われる結果を予測する。

（5）　意思決定の目的を認識し明確化して、目的の達成に沿った代替案を選び出すための選択規準（criterion）を設定する。

（6）　各代替案を適用した場合に得られる結果を選択規準に照らして評価する。

（7）　評価の結果もっとも好ましい代替案が選択され、意思決定が完結する。

（8）　選び出された行動案が実施にうつされる。行動実施の結果、問題が首尾よく解決されたならば、一件は落着する。

（9）　行動案実施の結果問題の解決を見るにいたらなかった場合には、意思決定は元に戻って、別な案を探求しなければならない。

＊

〔事　例〕

意思決定の方法を用いた事例を次にあげることにしよう。現在は６月であり、釣り仲間と釣りに出ることを考えている。

（1）　そこでどんな魚をどうゆうふうに釣ったらよいかが問題となる。

（2）　釣りには、河川湖沼での淡水魚釣りと海での海水魚釣りがある。相談の結果、海釣りが良いのではないかということになった。仲間の一人が海の近くに住んでいるので、そのほうが何かと都合が良いであろうというのである。仲間の中には海から結構遠いところに住んでいる者がいるが、漁港近くに住んでいる者がいると、連絡係として何かにつけ重宝である。海釣りにも、岸壁、砂浜,磯などからの釣り(おかっぱり)と船で釣る沖釣りとがあるが、釣果を考えれば、沖釣りがなんといっても有利であると考え、船宿から釣り船に乗って出ることにした。

そこで問題となるのは、何を対象魚とするかである。対象魚により、船宿ではそれぞれ別の船を用意し、集合時刻、出船時刻、道具立て、釣りえさ、船賃と割引制度などが相違しているからである。そこで近くの船宿で、今どんな釣り物があるかを調べてみた。

（3）　船宿で用意している釣りものの中で、われわれが今やってみたいと思うもののコースが３つあることがわかった。それらの特色は以下のとおりである。

Ａコース：メダイ釣り

対象魚はエボダイ科のメダイである。05:30amに船宿に集合,出船06:00am。船賃はえさ、あみこませ、氷つきで¥10,000、会員券持参者は割引が適用される。なおえさはサバの切り身またはムギイカ（スルメイカの当才もの）を使用する。サバの切り身の場合、メ

ダイよりさきにサバに食われてしまうことが多いので、イカえさが断然有利であるとのこと。サバは料金に入っているが、イカえさは各自別に負担する。釣れるメダイは60cm、4kg平均なので、相当頑丈な竿、リールなどのタックルが必要である。なお外道は、サバ科のマサバ、ゴマサバ、アジ科のカイワリなどである。

Ｂコース：マダイ釣り

対象魚はタイ科のマダイである。メダイ釣り同様、集合05:30am,出船,06:00am、船賃は沖あみえさ、あみこませ、氷つきで¥10,000、割引はメダイ船に同じ。釣れるマダイは大きいもので、50cm,3kg，道具立てはメダイとほぼ同じ．外道はサバその他。

Ｃコース：ライト・タックル（竿、リールその他の釣具が軽量化したもの）ウーリー針使用の五目釣り

対象魚は、アジ科のマアジ、イサキ科のイサキ、タカベ科のタカベ、フサカサゴ科のトゴットメバル、ウスメバル、メジナ科のクチブトメジナ、クロメジナその他である。06：30am集合、07:00am出船で沖あがり01:00pm。船賃はあみこませ、氷つきで¥6,500。仕掛けは３本針で、上２本はウーリー針、下の１本はえさをつけるので、えさの沖あみ代金は各自が負担する。会員券や割引券は使えない。

（４）　以上のＡ，ＢおよびＣ，３つのコースを実施した場合に予測される結果について考えてみよう。

Ａコースの釣り対象魚であるメダイは100m以上の深場を遊泳する大型の魚で、この釣りに慣れていないと、針がかりしても船上まで取り込むのが容易ではない。この魚の漁場（ぎょば）は太平洋であり、そこには4〜5mの鮫が棲息している。釣り上げたメダイは食べるときのことを考えて、野締めし、血抜きをする。この血を海に捨てると、鮫をよび、次にやっと針がかりして巻き上げの途中にあるメダイがそっくり一口に食べられてしまうことがよくあるので、せっかくあたりをとっても決して油断ができない。電動リールを高速で巻き上げなければならない。なお魚体が大きいので、大型のクーラーを用意しておく必要がある。また１日７時間ねらっても、１匹も釣れないこともある。しかし大型のメダイは１匹釣れれば十分であり、またどのような調理法によってもおいしく食べることができる。外道のサバはゴマサバが多く、夏が旬のこの魚は食べ頃である。この釣りはハイ・リスク、ハイ・リターンである。

Ｂコースのマダイは海魚の中でも姿が整っており、引きが強くて釣り味もよい上に、いろいろな調理に合い美味であることから、日本では最高級魚とされている。昔から、「人は武士、柱は檜、魚は鯛」といわれているのも、もっともなことである。夏のマダイは秋および冬の時期に比べて、一味落ちるという者もいるが、市場に養殖ダイの多いこの頃、天然ものの味はまた格別である。たとえ本命のマダイがだめでも、外道のサバの食味はすてがたいので、マダイ釣りも釣り師にとっては大変に魅力的である。

マダイは最近稚魚を放流して、自然の中で育てているので、資源としても確保されている。そうはいっても、マダイを釣るのは容易ではない。強風の吹いた翌日が曇り日のようなときや産卵のために深場から浮き上ってきたときには、爆釣もありうるが、通常はそう簡単に沢山釣れるものではない。ハイ・リスク、ハイ・リターンの釣りであるといえよう。

Ｃコース五目釣りの対象魚はアジ、イサキ

をはじめ、みな美味である。大きさの点では小物であるが、それぞれが個性のある味わいをもつている。釣り上げるのも容易であって、リールでの巻上げの途中でばらす（取り逃がす）ことは少ない。五目釣りのよさは、本命の魚が数種類あるので、必ず何かの魚は釣り上げることができる。したがって本命の魚が何も釣れないというリスクはないといってよい。本命のある魚が釣れなくても他の魚が釣れてリスクをヘッジしてくれる。その意味で、ロー・リスク、ハイ・リターンの釣りであるといってよいであろう。

（５）　Ａ，Ｂ，Ｃいずれのコースを選ぶのがよいかを決める選択規準として次の諸事項が挙げられる。

1)　同好の釣り仲間の中に遠方から参加する者がいるので、集合時刻はできるだけ遅いほうがよい。

2)　船賃は、大きくて食味の良い魚を対象にするコースほど高く設定されているが、できるだけ経済的負担の軽いものがよい。できれば会員割引やネット割引の適用されるものが望ましい。

3)　食味の良い魚を釣りたい。しかも一種類だけでなく、多種類の魚を味わいたい。

4)　目的魚は大物でなくてもよいが、安定して釣れるものを期待したい。

5)　夏の釣りなので、テントを張っていない関東の釣り船では、大変な暑さの船上にそう長い時間いたくない。真夏の炎天下の沖釣りは、船上にいるだけでも、灼熱地獄で、体力の消耗が著しい。

（６）　３つの釣りコースのそれぞれを、選択規準に照らして検討する。

Ａコース

メダイは釣れると、大きくて食べでがあり、食味もよい。外道のサバも魅力的である。だが本命が針がかりする確立は高くないし、せっかくかかってもさめに食われずに取り込むことはリスクが大きい。割引が適用されるけれど、船賃は¥10,000と高いし、任意ではあるが、いかえさも買わなければならない。集合時刻が05:30amでは、遠方からやってくる仲間にとって負担が重い。

Ｂコース

マダイは良型のものが釣れれば申し分ないし、それなりにサバなどの外道も混じる。天然ダイであるから、食味は大いに期待できる。だが大マダイの釣れる確立はそう高くないようだし、マダイは釣れず、外道のサバだけということもなくはない。また船賃に割引が適用されるものの¥10,000はかなり負担になる。集合時刻も早く、Ａコースと同様の問題がある。

Ｃコース

集合時刻06:30amは、Ａ,Ｂコースに比べて楽である。船賃は、割引はきかないが、また乗船時間がＡ，Ｂコースより短いけれど、割安である。ライト・タックルを使うので、釣りの動作も負担が軽い。対象魚も複数で多様なおいしさを味わうことができる。炎天下に船上にいる時間が短いことは、体にとってそれだけ負担が軽い。

（７）　以上の比較検討の結果、Ｃコースの釣りが各種の選択規準に合致する度合いが高いので、今回はこの釣りに決定することにする。

（８）　Ｃコース案を実施に移し、ライト・タックル五目釣り船に乗り、沖に出て釣りを

始める。釣果のいかんに係らずコースの変更は不可能で、６時間は船上で釣りを楽しむことになる。

＊

起承転結がどちらかといえば、論文を取りまとめるための処理法であり、基本的な形式に関する方法であるのに対して、意思決定の方法は、実質的に研究を進める上での、あるいは問題解決のために適用される作業手順としての方法であると同時に、論文を取りまとめる形式に関する方法としても利用される。以上の意思決定のプロセスのうち、選択規準の設定に際しては、目的の達成に沿う、考えられる限り多くの命題をもれなく選び出して適用することが肝要である。選択規準が偏っていたり、選び出されないものが残されたときには、意思決定に続く行動結果にそれに応じた歪みが生ずることが少なくないからである。

４　おわりに

以上に述べたように、論文作成上、方法は便利で効果的な手段である。ここでは起承転結と意思決定の方法を取りあげて検討を加えた。前者は論文を取りまとめるための形式に使われて有効であり、後者は研究を行い、論文を実質的に作成するための手法であり、作業手順としての方法であるとともに、そのまま論文取りまとめの形式の方法としても用いることができる。このように理解するならば、起承転結は文学作品や詩歌を作るのに適した方法ではあるが、論文作成には不向きであるという批判は的外れに終わることになろう。

〈注記〉

起承転結については、次のような批判がある。すなわちこの方法は論文やレポートに向いた構造ではない。論文は予め行き先のわかっている文章であり、小説のように予測できない話の展開や結論を楽しむものではない。転が入っては論文として失格である。論文は結末への展開を楽しむためのものではなく、相手の注意をそらさずに、自分の主張で説得するものである。転の段階で、テーマを別の角度から検討することは論文の書き方として間違ってはいないが、それは本来の転の意味ではない。　この批判については、「小論文・レポートの書き方サイト」 Copyright © 2005-2008 を参照した。